



陶鑄の二冊の本を評す

姚 文 元

北 京 外 文 出 版 社

## 毛主席のことば

フルシチヨフのような個人的野心家や陰謀家にはとくに警戒し、このような悪人が党と国家の各級指導部をのっとることを防止しなければならな

ら。

陶鑄の二冊の本を評す

姚文元

外文出版社

北京

## 陶鑄の二冊の本を評す

姚文元

偉大なプロレタリア文化大革命は、つぎつぎと襲いかかる暴風雨のように、全中国をゆり動かす、全世界をゆり動かしている。

情勢はひじょうにすばらしい。文化の分野での大批判からはじまったプロレタリア文化大革命は、人の心を激しくゆり動かす一年の戦闘をへて、勝利のうちにいま、資本主義の道を歩むひとにぎりの党内最大の実権派にたいする大衆的な大批判の段階にはいるとしてゐる。この大批判は、重大な政治的意義をもっている。それはプロレタリア革命派による奪権闘争の深化、発展であり、修正主義の毒素をとりのぞく重要な段取りであり、幾百万幾千万の大衆を闘争、批判、改革に身を投じるよう動員する思想的原動力であり、政治、経済、文化、軍事の各面に毛主席のプロレタリア革命路線をより深くつらぬくための激しい大衆的闘争である。

われわれのまえにおかれた二冊の本——一九六二年中国青年出版社発行の『理想・情操・精

神生活』(以下『理想』とよぶ)と、一九六四年広東人民出版社発行の『思想・感情・文采』(以下『思想』とよぶ)は、われわれが大批判をくりひろげるうえでの絶好の反面教材である。これらの本は黒い『修養』の「姉妹編」であり、陶鑄というこの修正主義者の反動的で、醜悪な魂をはっきりと浮きぼりにしたものである。

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会のまえは、陶鑄は中国のフルシチョフに代表されるブルジョア反動路線の忠実な執行者であった。総会のあと、資本主義の道を進む二人の最大の実権派の反動的な正体が全党によってあばきだされてからは、かれはブルジョア反動路線をひきつづきおしすすめる主な代表者となった。かれは腹心の反革命修正主義分子王任重などと結託して、ひきつづき気違いのように、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線に反対し、それをねじまげ、偉大な毛沢東思想に反対し、抵抗した。そして、投降分子や裏切り者をかきあつめ、資本主義の道を進む党内の実権派とグルになって、いたるところに指示をだして革命の大衆をおさえつけ、反革命修正主義分子や化物どもを支持し、かばい、資本主義の道を進む党内最大の実権派にたいする党の第八期中央委員会第十一回総会の批判を卑劣な手段でおおいかくし、くつがえそうとたくらんだ。

歴史の前進は、反動派の力を過大評価し、人民の力を過小評価し、愚かにも自分を「英雄」にみせかけようとする時代錯誤の人物を、たちまち人の嘲笑を買うあわれな道化者にしてしまうものである。一九六六年七月三十日、「基本的にはプロレタリア革命家」だと吹きまくっていたこの人物は、一万人の集会で、傲然とこぶしを振りあげて、「諸君がわたしを信用しないなら、わたしを倒すがよい」とわめきたてたが、その時のかれはなんとおごりたかぶっていたことだろう。いまにも人を食い殺さんばかりであった。かれはこうして大衆をおどしあげ、自分のような「古株の革命家」にあえて反対するものはみなひどい目にあうだろう、自分のような「英雄」は絶対に「倒れ」はしないのだ、とほめかしたのである。だが、毛主席のプロレタリア革命路線に反対し、プロレタリア文化大革命に反対し、広範な革命的人民に反対してとび出してくるものは、だれであろうとかならず倒れる、これが歴史の論理である。十分に演技をやってみせた反動派ほど、その倒れぶりもいつそう徹底している。ふりかえってみれば、かれの自己吹聴や大衆をおどかす醜態も、二面派のメーカーシップにこっけいなくま取りを一本ふやしたにすぎなかったのである。

「わたしは一貫して革命的だった。」よろしい、われわれはこの二冊の本を主な資料として、

「一貫して革命的だった」人物がいったい「一貫して」だれのあとにくつついてきたのか、なににたいして「革命」をおこなってきたのか、どんな「理想」にしがみつき、どのような「情操」を鼓吹し、どの階級の「思想・感情」を宣揚し、どのような「精神生活」をおくってきたのかをみてみよう。

### ブルジョア反革命派の「理想」

陶鑄はどの「派」に属しているのだろうか。かれが本なかで鼓吹している「理想」とはどの派の「理想」なのだろうか。それに答えるには、かれの自供書に目を通すだけで十分である。

一九五五年八月、農業、手工業にたいする社会主義的改造が高揚期にはいり、プロレタリア階級とブルジョア階級とが食うか食われるかの闘争をおこなっているとき、陶鑄はとび出してきて、自分の胸をたたきながら、「われわれはみんな同じ派に属しており、この派は中国人民派とよばれる。反革命分子以外は、みんな心から団結しなければならない」①と公言した。だ

① 『理想・情操・精神生活』、中国青年出版社一九六二年版、第七七ページ

が、「反革命分子以外」の「みんな」も、一つが分かれて二つになる、つまりプロレタリア階級を一方とし、ブルジョア階級を他方とするのである。陶鑄は、知識人にたいする思想改造を「人格を侮辱する」ものだとあしざまに中傷し、胡適の反動思想も「思想方法の問題」に属するにすぎず、「三十年、四十年たった」のちに「はじめてはつきりする」①とデタラメをいつた。かれのいう「われわれはみんな」がブルジョア階級とその代理人である胡適のような人物をさすことはひじょうにはつきりしている。陶鑄の吹聴する「心から」抱擁しあわなければならない「中国人民派」とは、実際には、反人民的なブルジョア反動派なのである。

同じ演説のなかで、陶鑄はまた、限らない同情をこめて、「いま大陸に潜伏している反革命分子の境遇はあわれなものであり、かれらの心境は苦痛にみちている」といった。ことばは心の動きをあらわすものである。「あわれ」と「苦痛」で、反革命分子にたいする憎しみと、かれらの残虐さを一筆でぬりつぶし、反革命分子と心をかよいあわすかれの「精神生活」をはつきりとうきぼりにしている。このようにあざやかな「告白」も、『理想』におさめられるときは、「抜粋」されない部分としてけずられてしまった。

① 『理想・情操・精神生活』、第六一〜六三ページ

それから二年後の一九五七年五月、右派分子が気違いじみた攻撃をくりひろげていたとき、陶鑄は時をうつつさず新聞に文章を発表して、「現在、階級は基本的になくなっている」とか、「国内における敵味方の矛盾はすでに解決されている」とか、プロレタリア独裁の「独裁機能」を弱めて、「生産の指導」、「人民の経済生活の組織」といった分野に「移し」ていかなければならない①とさかんにわめきたてた。地主、富農、ブルジョア階級はみなひとつの「大家庭」の成員となったので、プロレタリア独裁を解消し、もっぱら「生産の指導」にあたる「全人民の国家」をただちに実現させてもよいというのである。プロレタリア独裁の転覆をねらうこうした徹底した修正主義の論調は、ブルジョア右派の頭目としての正体をあますところなくさらけだしたものである。

さらに二年後の一九五九年の上半期、社会主義革命がいつそう深まりつつあったとき、陶鑄は『松の風格』という文章のなかで、「劣悪な環境にもあくまで屈しない」②といい、「革命

① 「人民内部の矛盾と百花斉放・百家争鳴についての諸問題」『広東省の人民内部の矛盾

をどのように正しく処理するか』一九五七年五月四、五日付の『南方日報』

② 『理想・情操・精神生活』、第五ページ

的堅忍不拔」という文章のなかで、「大海にむかい」、「荒れ狂う暴風雨の襲撃」①に耐えぬかなければならないといった。すさまじい勢いの大躍進、世界の改造にいどむ革命的人民の英雄的な志は、かれによって「劣悪な環境」にされてしまったのである。また、社会主義革命の嵐がブルジョア階級や地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子およびかれらの代理人彭德懷反党集団に打撃をあたえたことについて、かれは「荒れ狂う暴風雨の襲撃に耐えぬかなければならない」と気違いのように叫びたてたのである。ここには、一言半句をつけくわえなくても、反革命的立場がはっきりとあらわれている。

さらに六年すぎた一九六五年、偉大な中国共産党第八期中央委員会第十回総会ののち、毛主席は、国内における主要な矛盾はプロレタリア階級とブルジョア階級という二つの階級、社会主義と資本主義という二つの道の闘争であるとかうかえし指摘し、社会主義教育運動についての『二十三カ条』のなかでも、「今回の運動の重点は、資本主義の道を歩む党内の実権派を肅正することにある」と指摘した。中国のフルシチョフや陶鑄のやからは、毛主席のこれらの重要な指示にたいして、気違いのように反対し、抵抗した。一九六五年十一月、△海瑞の免官△

① 『理想・情操・精神生活』、第二〇ページ

にたいする批判がはじまり、反革命修正主義分子、中国のフルシチョフとの生死をかけた格闘が目の前にせまったとき、陶鑄は、反革命文学・芸術の黒い糸の宣伝道具である『文芸報』でふたたび「告白」した。かれは、「現段階では、人民内部の矛盾を反映する任務をもっとも重要な地位におくべきだ、とわたしは考える」①といった。「現段階」の主要な矛盾が「人民内部の矛盾である」というのは、国内の主要な矛盾が二つの階級、二つの道の闘争であることを公然と抹殺し、ひとにぎりの反革命分子、裏切り者、右派分子、資本主義の道を歩む実権派をすべて「人民内部」の問題にし、党をのっとり、政府をのっとり、軍隊をのっとりとうとするこれらの犯罪行為をおおいかくし、それによって党内にもぐりこんだ凶悪なブルジョア反革命派をのこらずかばおうということである。

なにか「一貫して革命的」なのか。一貫して反革命的だったではないか。歴史上の鍵になる時点で、かれはいつも公然とブルジョア階級の立場にたつて毛主席のプロレタリア革命路線に反対し、社会主義に反対してきた、といつてよい。かれの吹聴する色とりどりの「理想」なるものは、ブルジョア反革命派の理想であり、資本主義を保護し、発展させる反動的な理想であり、

① 『文芸報』、一九六五年第十一期、第三ページ

中国でプロレタリア独裁をくつがえし、資本主義を復活させようとするたわけた妄想である。みていただきたい。

陶鑄はいう。「社会主義思想とは、あらゆる方法をこうじて国家の急速な工業化を保証することである」①と。この極端に反動的な「社会主義」理論によれば、工業化されたアメリカはとつくのむかしに「社会主義」を実現したことになるのではないだろうか。「工業化」を実現するにも、社会主義と資本主義という二つの道、二つの路線、二つの「方法」がある。社会主義の道を歩むには、労働者階級と広範な革命的大衆に依拠し、政治を突出させ、毛沢東思想によって呼びおこされたなん億という人民の革命的自覚、革命的積極性に依拠して、企業の指導権をほんとうにプロレタリア革命派の手ににぎらせなければならない。資本主義の道を歩むには、かれの本のなかでくりかえし書きたてられているように、少数のブルジョア「専門家」に依拠し、「物質的刺戟」に依拠し、保守派に依拠して、企業の指導権をブルジョア階級の利益を代表する特権階級にのつとらせることである。「あらゆる方法」をこうじてとは、ブルジョア階級に依拠する方法をこうじて資本主義の搾取制度を発展させ、資本主義工商業にたいする

① 『理想・情操・精神生活』、第五一ページ



社会主義的改造をはばむということである。

「過去百余年にわたる中国の歴史はすべて、人からたたかれてきた歴史であった。その原因は、ほかでもなく、自国に工業がないことにあった」①と。陶鑄は無能な歴史の教師そっくりの口調で、われわれに中国近代史——もちろん転倒された歴史——の講義をしている。一八四〇年から一九四九年までの百九年間、中国人が「人からたたかれてきた」主な原因は、工業がなかったからではなくて、政權が帝国主義の手先、つまり清朝政府、北洋軍閥から蒋介石にいたる一連の売国奴どもにぎられていたからである。中国のプロレタリア階級と勤労人民が偉大な指導者毛沢東同志の指導のもとに全国の政權を奪取してからは、さすがの帝国主義も、ふたたびわれわれをたたくこうとするさいには、まず自分にどれだけの力があるかを考えてみなければならなくなっている。文化大革命が徹底的におこなわれればおこなわれるほど、毛沢東思想が人の心のなかに深くはいればはいるほど、プロレタリア独裁がうち固められれば固められるほど、戦争がおこったとき、ますます天下無敵となる。これこそプロレタリア革命派の「理想」である。過去に「人からたたかれてきた」ことをすべて「工業がなかった」ことに帰して

① 『理想・情操・精神生活』、第四五ページ

しまふなら、極悪非道の売国奴どもの犯罪行為をすべておおいかくすことになり、「工業を発展させる」という看板のもとに資本主義の復活をはかってきた国際ブルジョア階級の中国における手先を美化することになる。これは中国のフルシチョフと瓜二つの売国主義の論調である。

陶鑄はいう。「共産主義の理想」とは、「住み心地のよい家」のことであり、「夜になるとどの家にも電灯がともし、すべての人がきちんとした、きれいな服を着、外出する時には自動車にのる……」②ことである、と。ひと言でいえば、「うまいものを食べ、きれいな服を着、住み心地のよい家に住む」ことなのである。つまり、享楽主義である。「うまいものを食べ、住み心地のよい家に住ま」わせてくれる人がおれば、相手がだれであろうと、自分の魂を売りわたしてもよく、そのうえ安い値段で「共産主義」の帽子を献上してもよいのである。これは、まったく卑劣きわまる裏切り者の哲学である。「共産主義」のベールと、極端な個人主義つまり資本主義の本質——これこそ陶鑄のいう「共産主義の理想」の定義である。この定義にしたがえば、アメリカのブルジョア階級の生活が「共産主義の理想」にもっともかかって

① 『理想・情操・精神生活』、第一二二ページ

いることになるのではないだろうか。

陶鑄はいう。「崇高な理想」とは、かたときも忘れることなく、「自分は将来航海家、飛行家、科学者、文学者、技師、教師……になることを考える」①ことである、と。ここには、なにになに家、なにになに家ばかりで、労働者や農民、兵士がいない。このプロレタリア階級の裏切り者からみれば、革命的な労働者、農民、兵士はひじょうに「低い」地位におかれるべきもの、いや低い地位どころか、文字どおり地獄にたたきこみ、どん底におしこんで、永遠にたちあがれないようにしておくべきものである。逆に、一連のプロレタリア階級のなにになに「家」は、ひじょうに高い地位、ひいてはきわめて「崇高」な地位におかれるものなのである。「ブルジョア階級は民主主義運動に参加したことがあるし、かれらは工業を経営する知識をもっており、地主のように腐敗してはいない。」②なるほど、これで陶鑄のいうこれらのなになに「家」がプロレタリア階級の専門家ではなく、ブルジョア階級と文化界におけるその代表者であることをみずからみとめたことになる。かれのいう「知識」とは、資本家がどのよう

- ① 『理想・情操・精神生活』、第九五ページ  
② 同書、第五〇ページ

に巧妙にしかも残酷に労働者を搾取するかといったたぐいの知識のことである。かれのいう「崇高な理想」とは、ひじょうに「高い地位」にのしあがったこのようなブルジョア階級の代表者をつうじて、反革命的な復活をおこなうことである。しかし、こんにち、ひじょうに「高い地位」についていたブルジョア階級の「権威者」どもは、革命の小勇將たちにひきずりおろされてしまったのである。

もう一つ、陶鑄はいう。偉大な理想とは、「みんながほんとうに晴々とした気持ちになる」ことである、と。一九六二年、ブルジョア階級がプロレタリア階級にたいして気違いじみた攻撃をかけ、妖魔がおどり狂い、毒草がはびこっていたとき、ブルジョア階級を「晴々とした気持ち」にさせるために、陶鑄は『創作をさかんにするための意見』という文章のなかで、ブルジョア知識人のうち、「少なからぬものは、すでに勤労人民の知識人となっている」とか、「勤労知識人の積極性を發揮させなければならない」③とかデタラメをいった（注||陶鑄の報告の原文を調べてみると、「圧倒的多数の知識人は、いまはすでに勤労人民の知識人となっているので、ブルジョア知識人のレッテルはとらなければならない」となっている）。けっこう

- ③ 『思想・感情・文采』、広東人民出版社一九六四年版、第三七―三八ページ

な話である。「三家村」とか、田漢、夏衍、吳晗、翦伯贊とか、海瑞、魏徵、李慧娘とかいった連中がみな「勤労人民の知識人」だというのである。こうしてレットルがはがされ、新しい栄光があたえられれば、かれらは資本主義復活のための世論準備にいっそう「力をいれる」ことが出来るようになるのではないだろうか。また、楽しく「みんながうちとけ、晴々とす」れば、資本主義の復活も気楽になしとげられるのではないだろうか。

プロレタリア階級とブルジョア階級とは、かならずどちらかが「晴々と」しないものである。これは階級闘争の必然性である。プロレタリア階級の気持ちは「晴々としている」日は、ブルジョア階級が災難にあつてるときである。ブルジョア階級の気持ちは「晴々としている」日は、プロレタリア階級が苦痛をなめてるときである。二者のいずれかなのである。ブルジョア階級が「晴々と」しないと、不平をならべるものは、自分自身がブルジョア階級と運命をともにしていることを証明しているのである。

陶鑄は、かれのこのような「社会主義の理想」はブルジョア階級をふくむ「すべての人びとにとつて」「有益なものである」といつている。社会主義とは、プロレタリア独裁をつうじてブルジョア階級を完全に消滅させるものであるのに、どうしてブルジョア階級にも「有益なも

の」なのだろうか。「すべての人びとにとつて有益である」「社会主義」は、ニセの社会主義であり、フルシチョフ式の修正主義であり、資本主義は社会主義へと「成長をとげる」というプハーリンの反革命理論であり、階級闘争を解消し、プロレタリア独裁を解消する「全人民の党」、「全人民の国家」、「全人民の社会主義」の反動理論であり、社会主義が中国で偉大な勝利をおさめたのちに資本主義を復活させようとするスローガンである。

もうたくさんだ。このブルジョア階級の代理人の正体をはつきりとみぬくには、以上にあげた資料だけで十分である。かれが固持しているのは社会主義に反対する資本主義の道である。かれが愛し、考え、たたえているのは資本主義であり、かれが憎み、おそれ、ののしっているのは社会主義である。これらの文章のなかの「理想」とは、ひと言でいえば、ブルジョア階級の醜態な姿で国家を改造し、社会を改造し、党を改造しようとする事なのである。

この人物にはつぎのような「名言」がある。それは、「社会主義思想」または理想を「確立する」とは、「社会主義思想に思想全体の少なくとも五十数パーセント以上を占めさせるようにすることだ」①②というのである。人の世界観をどうしてパーセンテージで計ることが出来る

① 『理想・情操・精神生活』、第四九ページ

のだろうか。デタラメもはなはだしい。化けの皮をひきはがせば、実は拙劣きわまる大ペテンなのである。これはブルジョア階級に、偽装をこらしてあらわさせ、「五〇パーセント」のこゝとばに「社会主義思想」のボールをまとわせて、資本主義の醜悪な本質をおおいかくすようにと、教えているのである。これはもつとも典型的な修正主義である。この二冊の本は、こうした手法をもちいて書かれたものにほかならない。資本主義の道を歩む党内最大の実権派は、ブルジョア階級に自分の「胸のなかをうちあけ」てこう語ったことがある。「ブルジョア階級」は「マルクス主義」の字句を「覚え」さえすれば、「笑顔」で、「平和的に社会主義にはいっていく」ことができ、名誉と利益の両方をともに手にいれることができる、と。これこそ「五十数パーセント」の「社会主義思想」にたいするもつとも適切な注釈である。「理想」！「理想」！ブルジョア階級はこのような忠実な代理人をみて、ほんとうに感激の涙を流すことだろう。

### 裏切り者プラス奴僕の「精神生活」

この二冊の本のなかで、どのような「精神生活」が鼓吹されているかを知りたいならば、こ

の本をじっくり読む必要はない。その「精華」をとりだせば十分である。国民党の反動哲学プラス奴僕の「思想」——これがすなわちそれである。

陶鑄は、国民党のきわめて腐りきった反動的観念論や人殺し蔣介石の黒いことばをしっかりと胸にきざみつけており、すらすらと暗唱できるくらい覚えこんでいる。これらの反革命的なしろものが、かれの「精神生活」のなかで第一に重要な地位を占めているのである。裏切り者の口からでなければ、このように反動的なことばは吐けない。

蔣介石はその反革命的な言論のなかで、つぎのようにいったことがある。「政治の意義について、総理はすでに、『政』とは公衆の事柄であり、『治』とは管理のことであり、公衆の事柄を管理することがとりもなおさず『政治』である、とわれわれにはつきり教えている。……だから『政治』の意義とは、全国総動員という科学的方法に到達することによって、公衆の事柄を管理し、国家全体と民衆全体のために最大の福祉をはかることである。」④

陶鑄は、このことばをそのままもってきてこういつている。「まず第一に、なにが政治であるかを知らなければならない。みんなは孫中山先生を知っているだろう。かれは『政とは公衆

の事柄であり、治とは管理のことであり、公衆の事柄を管理することがとりもなおさず政治である」といったことがある。……われわれが「公衆の事柄を管理する」のは、国家を富強にし、人民を幸福にするためである。……それはつまり人民のために利益をはかることなのであり、道理をはつきりと説明してみんなにそれをのみこませ、社会主義社会を建設する活動によることで参加させることなのである。」①

陶鑄は恥知らずにも、自分は蔣介石の「生徒」であるといったことがある。いや、より正確に言えば奴僕なのである。かれのこういった言論はまるで奴僕そっくりではないだろうか。

政治を「公衆の事柄を管理すること」というのは、ブルジョア搾取者の反動的観点である。抽象的な「公衆」などはありえず、階級社会の「公衆」は階級に区分されている。抽象的な「管理」などもありえず、階級社会の「管理」とはつねに階級間の関係进行处理することであり、どの階級が権力をにぎり、行使するかという問題である。毛主席は『延安の文学・芸術座談会における講話』のなかで、「政治は革命的であれ反革命的であれ、すべて階級対階級の闘

① 『理想・情操・精神生活』、第四二―四三ページ

争である」②とときわめて深刻に指摘している。毛主席のこの観点によって分析するならば、政治とは、あれこれの階級の権力をうち固めるか、あるいは打倒するために闘争することであり、あれこれの所有制を守るか、あるいはうちこわすために闘争することであり、あれこれの階級（集団）の利益をたたかいたるか、あるいは擁護するために闘争することである。プロレタリア階級は全人類を解放してはじめて、最終的にみずからを解放することができる。したがって、プロレタリア階級がブルジョア階級の抑圧をくつがえし、プロレタリア独裁を樹立し、うち固める政治闘争は、自己の階級の利益を代表しているばかりでなく、広範な勤労人民の利益をも代表しているのである。ところがブルジョア階級は、その政治活動の階級的内容をおおいかくし、またプロレタリア階級と勤労人民にたいするブルジョア階級の抑圧と搾取をおおいかくすために、反革命の政治を抽象的に「公衆の事柄を管理すること」といいくくめている。これは一八世紀のブルジョア階級から「全人民の国家」を実現させているソ連現代修正主義者にいたるまでの共通の手法である。蔣介石のいわゆる「公衆を管理する」とは、反革命の国家機構を使って、広範な勤労人民にたいし血なまぐさい弾圧と殺りくをおこなないながら、地主、

② 『毛沢東選集』第三巻、第八六八ページ

ブルジョア階級の革命的支配を「国家全体と民衆全体の幸福をはかるためである」といいうるめ、そのうえ「総動員」ということでペテンにかけようとするものである。その卑劣さ、恥知らずぶりは極点にたっている。ところで、その奴僕——陶鑄がこういったやり口をそのまま持ちだしたのは、ほかでもなく、革命的な資本主義の復活を実現させ、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の独裁を解消し、ブルジョア階級やすべての反動派の利益に奉仕する奴僕行為を「人民のために利益をはかる」といいくるめようとするものであり、そのうえ「道理をはつきりと説明する」などといってペテンにかけようとしているのである。これも同様に、その卑劣さは極点にたっている。

蔣介石はその革命的な言論のなかで、「親愛精誠の精神」とか、「先知先覚」とかいったものをさかんに吹聴した。陶鑄もそれをそのまま頂戴してつぎのようにいつている。

「われわれは孫中山先生のいわゆる『先知先覚』、『後知後覚』という言い方を完全に否定するものではない。社会には、こうした状況——進歩のはやい人もいるし、進歩のおそい人もいるが、向上心がありさえすれば、結局は進歩することができるという状況——が存在してい

るのである……。」①

「マルクス主義者は他人にたいしては寛大であり、自分にたいしては厳格でなければならぬ。……党外の人士にたいしてはひじょうに高い要求を出すのではなくて、孫中山がいったように『精誠団結』を求めなくてはならない……。」②

「先知先覚」、「後知後覚」という言い方は、階級的内容をぬききり、社会的実践から遊離した史的観念論の反動的観点である。毛主席は、「人間の社会的存在は、人間の思想を決定する。そして、先進的な階級を代表する正しい思想は、ひとたび大衆ににぎられると、社会を改造し、世界を改造する物質的な力となる」③と指摘している。死んでも悔い改めようとする反革命修正主義分子や、いくら教育しても改めようとする資本主義の道を歩む頑固分子があくまで資本主義の道を歩むのは、かれらが「後知後覚」だからではなく、かれらの社会的存在、つまりブルジョア階級の階級の地位がそうさせているのである。また、殺人鬼アメリカ帝

① 『思想・感情・文采』、第二ページ

② 広東省の「民主人士」にたいしておこなった陶鑄の講話（一九六一年九月二十七日）

③ 毛沢東『人間の正しい思想はどこからくるのか』

國主義やソ連共産党の裏切り者集団がその実行している路線にいくら小細工をろうしても、それがアメリカの独占ブルジョア階級とソ連のブルジョア特権階級にしか奉仕することのできない反革命の路線であるのは、かれらが「向上心」にかけているからではなく、かれらがブルジョア階級の代表だからである。プロレタリア革命派が幾重もの障害物をつき破り、また、資本主義の道を歩む党内最大のひとにぎりの実権派によるさまざまのゆゆしいあるいは残酷な抑圧を突破して、勝利をかちとつたのは、かれらが「先知先覚」だからではなく、かれらが毛沢東思想をつかみ、中国と世界のプロレタリア階級の最高の知恵を集中したこの理論的武器をつかんでいるからであり、プロレタリア階級と広範な勤労人民の利益を代表しているからである。だからこそ、かれらは戦えば戦うほど強くなり、あらゆる困難に屈せず、いつまでも旺盛な革命的樂觀主義を保持できるのである。こんにち、陶鑄がこうした反動的な觀念論をもちあげているのは、ブルジョア階級も「結局は進歩することができる」ということを人びとに信じこませ、人民の革命的警戒心を麻痺させ、ブルジョア階級がプロレタリア階級の内部にまぎれこんで破壊活動をおこなうのをたすげるためである。

陶鑄のいう「精誠団結」なるものは、まぎれもなく、国民党反動派のことばである。同じことばでも、それぞれの階級によって違った解釈がされる。われわれもときにはこのことばを用いるが、それは一定の革命的目標のもとに団結して、プロレタリア階級の革命的任務を実現するために闘争することをさすのである。われわれは従来から、社会主義の方向のもとの団結、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の原則を基礎とした団結について語ってきた。ところが、陶鑄のいう「精誠団結」なるものは、原則をなげすて、社会主義の方向にそむき、ブルジョア階級の要求にかなう「精誠団結」なのである。団結と闘争は、統一体における互いに矛盾する二つの側面であり、闘争がなければ団結もありえない。団結は相対的なものであり、過渡的なものであるが、闘争は絶対的なものである。世界中の事物はつねに発展のなかで一つが二つに分かれるのであり、人びとの認識もつねに闘争をつうじて発展していくのである。毛主席が指摘しているように、「マルクス主義が闘争のなかではじめて発展するということ」は、過去においても現在においてもそうであるだけでなく、将来においてもかならずそうである<sup>①</sup>。陶鑄のいうような永久に変わらない「精誠団結」などというものがどこにあるだろうか。占いは、「黙ってすわればびたりと当てる」という看板をかかげているが、これは人をだます手

① 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」

口である。蒋介石は「精誠団結」なるもので、内部の犬どものけんかをおおいかくし、これをファッショ思想をそそぎこむ道具にしているが、陶鑄は「マルクス主義」の看板をかかげて、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の闘争をきりくずすという破天荒のことをやっているのである。

この本はまた、「一九二五——二七年の大革命の初期に勝利をかちとることができたのは、孫中山先生が国民党を改組し、三大政策を実行して、当時の革命の客観法則に『順応』したからである」<sup>①</sup>といっている。一九二五年から一九二七年にいたる第一次国内革命戦争初期の勝利を、毛沢東同志に代表される中国共産党の正しい指導と正しい政策に帰するのでもなければ、革命的人民の闘争に帰するのでもなく、すべてを国民党に帰するのは、まったく歴史をねじまげ、是非を転倒させ、国民党反動派の立場に立つてものをいっているのである。無数の革命烈士が血であがなった勝利の果実を献上して国民党をもちあげる——これが裏切り者の言いぐさでなくてなんであろうか。

もうたたくさんだ。こうしたけがらわしい言論は、陶鑄の「精神生活」の奥深いところに国民

① 『理想・情操・精神生活』、第六七ページ

党の反動哲学の世界がよこたわっていることをあばきだしているのではないのか。

国民党の反動哲学をのぞけば、のこる「思想」は、すべて黒い『修養』のなかのガラクタである。

『理想』は、「個人の利益と集団の利益は不可分であり」、「仕事をよくやっている」ようにみせかけさえすれば、「重視され」、「重んじられ」、「称賛され」、はては「全中国、全世界にその名を知られるようになる」などといって、青年をだましているのではないのか。これは、中国のフルシチョフの「小さく損をして大きく得をする」という投機商人の俗物哲学をそのまま焼きなおしたものである。資本主義の道を歩む党内最大の実権派は、一九六〇年二月、民主建国会、工商業連合会の常務委員と会ったとき、ブルジョア階級の代表者に献策して、「誠心誠意人民に奉仕すれば、個人の利益も得られる」<sup>①</sup>といった。このことは、かなり簡潔にこのブルジョア野心家の数十年にわたる「処世」体験を総括しており、このプロレタリア階級の裏切り者の人生哲学の「精髓」を概括している。「人民に奉仕する」とか、「集団

① 中国のフルシチョフの『中国民主建国会中央委員会、中華全国工商業連合会の指導者との談話要録』（一九六〇年二月十二日）



の利益」とかいったことは、このひとにぎりの連中にとつては、みないつわりであり、ペテンであり、人にみせるためのものであり、手段である。そして、「個人の利益」、個人の権力、個人の享樂を手にいれることこそがほんとうなのであり、目的なのであり、みにくい魂の本質なのである。これはブルジョア階級の反革命二面派が革命陣營の内部にまぎれこんで権力を奪いとうとする術策である。いま、かれらはこうした手口をつかつて若い世代を毒しているが、われわれはこのような人をそこなう罪惡をだまて見すごすことができるだろうか。

「理想」はまた、「われわれに共通した世界觀と共通した思想方法」は「客觀的現實から出発する態度であり、是は是、非は非という態度である」<sup>①</sup>などといって、青年をだましておいてではないのか。これも、中国のフルシチョフのところから仕入れてきたしるものである。階級社会では、是非のいずれにもはっきりした階級的基準があり、いわゆる「現実」とは、なによりもまず階級闘争の「現実」のことである。それは、プロレタリア階級の側にたつかそれともブルジョア階級の側にたつか、帝國主義の側にたつかそれとも革命的人民の側にたつか、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の側にたつかそれとも修正主義の側にたつか、毛主席をはじめ

① 「理想・情操・精神生活」、第六八、六九ページ

めとするプロレタリア司令部の側にたつかそれとも反革命的なブルジョア司令部の側にたつか、ということである。抽象的な「是非」によって、問題をみるばあいの階級的立場をおおいかくすのは、魂を売りわたす日和見主義者に「共通した」特徴である。一九四九年五月、中国のフルシチョフは、天津でブルジョア階級にひざまずくという醜態を演じたが、そのことを報告したとき、はずかしげもなく、「資本家はわれわれの新聞がよくないといった。わたしは、たしかによくない点があり、わたしもそれを認めると答えた。……今後は、是は是、非は非、よいものはよいもの、悪いものは悪いもの、……資本家によいところがあればよいといい、労働者に悪いところがあれば悪いという態度をとるべきだ」<sup>①</sup>といった。みていただきたい、かれはなんと「現実から出発」していることだろう。「資本家によいところがあればよいといい」、「労働者に悪いところがあれば悪いという」——これはまたなんと「公平」な裁判官であろう。この労働貴族の「是非」は、なんとはつきりしていることだろう。このブルジョア階級の奴僕は、主人の「よい」ところをなんと忘れないでいることだろう。労働者に「悪い」としかりつけたかれの憎々しげな態度はまたなんと露骨なことだろう。「理想」の著者は魂を売

① 中国のフルシチョフの『北京の幹部會議での講話』（一九四九年五月十九日）

りわたす某氏の哲学を実によくそらんじているのである。

『理想』は、「弁証法的唯物論」を「存在第一、思维第二、客観第一、主観第二」①と歪曲しており、人の主観的能動作用を完全に抹殺し、物質が精神に変わり、精神が物質に変わる飛躍を完全に抹殺し、実践―認識―再実践―再認識という人びとの認識の発展の弁証法的過程を完全に抹殺している。これは「弁証法的唯物論」などというものではけっしてなく、反動的な形而上学である。プロレタリア階級が客観世界を認識する唯一の目的は、事物自身の発展法則にもとづいて客観世界を改造することにある。客観世界の改造を否定し、革命を否定し、歴史の前進をうながす奮闘を否定してしまえば、「客観第一」は空文句にすぎないではないか。だが、このように批判するだけではまだ不十分である。かれがこうした機械的唯物論あるいは俗流唯物論を宣伝するのは、風向きしだいでもプロレタリア階級の利益を売りわたすことのできる日和見主義を宣伝して、ブルジョア階級に奉仕するためである、ということを知っておかなければならない。そうではないか。ブルジョア階級も「客観的存在」のひとつであるから、ブルジョア階級の立場から出発して、ブルジョア階級の話を書き、ブルジョア階級の利

① 『理想・情操・精神生活』、第六九ページ

益を基準にして「是は是、非は非」とすることができ、こうして資本主義復活も「実事求是」、  
「弁証法的唯物論」をよそおって出現することができないか。のぞき眼鏡をばらせば、  
こんなからくりにすぎないのである。

陶鑄は得々として青年たちに、「世の中には男と女がおり、そこには恋愛がある」②といっ  
たのではなかったか。これはすぐに、中国のフルンチョフのデタラメきわる「名言」、「牛プ  
ラス牛はやはり牛である。……しかし、雄牛プラス雌牛では新しい関係ができ、男と女とでは  
夫婦の関係ができる。すべてのものはみな矛盾の統一体である」③を思いおこさせる。これら  
の連中からみれば、人と人との関係は、雄牛と雌牛との関係なのである。階級社会では、人び  
とは階級区分、階級関係によって結ばれているのであって、男女の関係も例外ではない。魯迅  
は「『硬訳』と『文学の階級性』」という文章のなかでこういつている。「凶作地の罹災民は  
おそらく、金持ちの大旦那のように、蘭の花などうえようとは思わないだろうし、賈府の焦大  
(古典小説『紅樓夢』にでてくる封建家族賈府の召使い―訳注)は、林妹妹など愛しはしない。」こ

① 『文芸報』一九六五年第十一期、第六ページ

② 中国のフルンチョフの『党員の組織上、規律上の修養について』(一九四一年)

の基本的な事実は、かれらによって抹殺され、踏みにじられてしまった。だが、こういったかれらの低俗きわまりないことばでは、マルクス主義の階級分析をすこしも損うことができず、かれら一味の心のなかの相互関係およびその「修養」、つまり「雄牛プラス雌牛」、「男と女」といったたぐいのブルジョア階級の醜悪なしろものを映し出すだけである。「修養」をさかんに口にする連中のなかに、腐敗しきった偽君子でないものがひとりでもいるだろうか。

本のなかで、「ひとりの人間の数十年にわたる生活のなかで」の「成功と失敗」を決定するものは、「主観と客観の一致、不一致である」①といている。陶鑄は、国民党の支配のもとで、いったいどのように媚びへつらって「主観」と「客観」を「一致」させたのか、また、この「数十年」の「成功」のなかで、どのようにアメリカ帝国主義、国民党反動派、革命的ブルジョア階級と「一致」してきたのか、これらのことを白日の下にさらけだすべきでないというのだろうか。

① 『理想・情操・精神生活』、第六七ページ

プロレタリア階級にたいするはげしい憎しみの「感情」

一九五九年五月、修正主義分子彭徳懐が資本主義を復活させようとする黒い綱領をもちだす前夜、陶鑄は『太陽の輝き』という文章のなかで、「海瑞」のようなポーズをとって、われわれの偉大な社会主義事業、偉大な党、偉大な指導者をおおっぴらに、口ぎたなくのしつた。かれは一方で、人びとは「東の空は紅にそまり、太陽がさしのぼる」ということばで、「われわれの偉大な事業の活気にみちたありさまを形容し」、「われわれの党と指導者を太陽になぞらえてたたえている」といいながら、他方では、公然と「太陽」の「過失」を攻撃するという形をとって、「真夏、火のような太陽に照りつけられて汗を流せば、人びとは太陽の光と熱があまりにも強すぎると恨み言をいうだろう。しかも、みんなは太陽自身にも黒点があることを知っているばかりか、そのことを指摘してきたのだ」①とあてこすった。

「太陽自身にも黒点がある。」これはわれわれの党と偉大な指導者をあからさまにののしっているのではないだろうか。陶鑄の目からみれば、「黒点」どころか、社会主義は真っ暗やみ

なのである。ブルジョア階級の目で問題をみるものには、光明と暗黒がさかさかになる。かれらは、めくら以上に物がみえないのだ。この修正主義者からみれば、「太陽」からの社会主義の光が資本主義の道を歩む実権派を我慢できなくなるまで照らしつけて、正体をあらわさせ、「汗を流」させ、「ひどすぎる」と思わせたことが、「太陽」の「過失」だというわけである。その実、これこそ「太陽」の偉大なところなのである。うす暗い片隅にひそんでいる化物、とこじらみやしらみ、細菌や病毒は、「太陽」の光と熱にあたれば、たちまち死んでしまう。しかし、真の勤労人民はまさに太陽の光のもとでこそしっかりした人間に鍛えあげられるのである。太陽の光にも照らされず、汗も流さないで、どうして体を丈夫にすることができらうか。「太陽」の「光と熱」をのしっているのは、実際には、プロレタリア階級を「ひどすぎる」とのしり、社会主義、人民公社を「いきすぎだ」とのしっているのである。これはまぎれもないブルジョア階級の黒いことばであり、かれこそが太陽の光をおそれている化物であることを暴露したものである。

陶鑄は『松の風格』という文章のなかで、「松」をたたえて、「夏ともなれば、松は自分の

枝や葉で焼けつくような太陽の光をさえぎる」①と書いているのではないか。毛沢東思想の陽光はさえぎることができないのであり、あくまで光明に戦いをいどむなら、自分自身を暗やみからより深い暗やみへと落ちこませるだけである。

注目にあたいたいするのは、一九六五年に『理想』が再版されたさい、「われわれの党と指導者を太陽になぞらえてたたえる」という一句が、急に「われわれの偉大な、光栄ある、正しい党を太陽になぞらえてたたえる」と改められたことである。これこそ、かくせばかくすほどポロが出るということであり、悪党のうしろめたい気持ちをも自分であざやかに暴露したものである。「指導者」という三字をけずったのは、陶鑄が一九五九年から一九六二年にかけて、この文章を書き、この本をだしたとき、ほこ先を偉大な指導者に向けていたことをあますところなく証明しているのではないのか。もしそうでないなら、そんなにあわててけずる必要がどこにあったのか。「党」のまえに「偉大な、光栄ある、正しい」ということばをそえたのは、かれが一九五九年から一九六二年にかけて、この文章を書き、この本をだしたとき、中国共産党が偉大な、光栄ある、正しい党ではないと考えていたことをあますところなく証明しているのだ。

はないのか。もしそうでないなら、大急ぎでつけくわえる必要がどこにあったのか。心にやましいところがあり、顔がほてるので、このようにあわてふためいたのである。一九五九年五月、陶鑄は汕頭での報告のなかで、彭德懷の攻撃と呼応するために、「海瑞の風格に学ばなければならぬ」とわめいたのではなかったか。だが、どうやらこの「海瑞」の「風格」はそんなに「高く」はなく、やり口も拙劣そのものだったようだ。このように書きかえたために、彭德懷一味に呼応しておこなつた反党・反社会主義・反毛主席の犯罪行為を自白したことになり、動かぬ証拠も山ほどあり、いいのがれができなくなったのである。

一九五九年九月下旬、廬山会議が終わり、彭德懷反党集団はあばきだされ、修正主義分子の気違いじみた進攻は徹底的に粉碎された。そこで、この修正主義者は『得がたい勝利』という文章のなかで、「ごく少数の人」が「われわれの仕事のなかの欠点をほじくりだすのに血道をあげている」①②ことに、もっともらしい不満を示さざるを得なかった。だが、この「ごく少数の人」とはだれのことなのか。陶鑄もその一人ではなかったのか。自分の文章のなかで、「われわれの仕事のなかの欠点や誤りをせせなければならず、たとえそれが十本の指のなかの一本

① 『理想・情操・精神生活』 第二六ページ

の指のような問題であつてもせざるべきだ」③、と命令したのは陶鑄ではなかったのか。社会主義のいわゆる「暗黒」、「黒点」を暴露することに血道をあげたのもかれではなかったのか。これはいいのがれのできないことである。かれも一枚くわわつていたからこそ、この文章のなかで、この「ごく少数の人」に無限の同情をよせ、「われわれがこの人たちをとりあげるのには、かれらが立場をかえて、なによりもまず、社会主義建設の隊列に身も心も投じるよう望んでいるからである」④などといったのである。これは、破産した右翼日和見主義分子にたいして、「立場をかえる」ふりをしながら革命の「隊列」にまぎれこみ、ひきつづき反社会主義の悪事をはたらくよう勤めたものである。

プロレタリア階級には腹のそこから憎しみをいただき、ブルジョア階級にはこまやかな思いやりをよせる。これが陶鑄の「感情」である。化けの皮をはがせば、そこには、このような悪魔が立っていたのである。

① 『理想・情操・精神生活』 第一一ページ

② 同書、第二七ページ

## 腐りきった「文采」

虚勢をはった文体、ひねくりまわした意味のつうじないことは、それでいて「文采」がある  
と自任しているが、まったく鼻もちのならない話である。なにもわかつていないのに、頭をふ  
って八股調を口にするあの低俗な田舎地主そっくりである。

「文采」などないにもかかわらず、かれは本のなかで、一連のまとまった修正主義の文学・  
芸術路線を必死になって宣伝している。陶鑄は、資本主義の道を歩む党内最大の実権派の反動  
的文学・芸術綱領を忠実に執行しており、陸定一や周揚と文字通り同じ穴のムジナである。一  
九六〇年の春、旧文化部の夏衍、陳荒煤らの反革命修正主義分子は、いわゆる「全国ニューズ  
映画工作会議」をひらいたとき、この大毒草——『思想・感情・文采』を会議用文献として印  
刷、配布し、みんなに「学習」させた。このことから、かれらがどれほど深く結びついてい  
たかがわかる。毛主席の文学・芸術路線に反対するために、陶鑄は、文学・芸術界に広まって  
いたさまざまな反動的論点、たとえば人間性論、「真実描写」論、「創作自由」論、「中間人  
物」論、「化け物無害」論など……をのこらず自分の黒い店にかきあつめた。つぎに、そのう

ちの一、二をあげて、少し反ばくをくわえてみよう。

陶鑄はいう。「共産党員は感情を重んじるものである……反革命分子以外の、すべての人に  
たいして感情をもたなければならぬ」①と。階級社会では、階級的感情があるだけで、超階  
級的感情などというものはない。ここでいう「感情」とは、「愛」のことをさしている。「す  
べての人にたいして感情をもたなければならぬ」というのは、現代修正主義の「すべての人  
を愛さなければならぬ」ということとおなじであって、搾取階級を愛し、裏切り者を愛し、  
奴僕を愛し、資本主義の道を歩む実権派を愛さなければならぬということである。これは反  
動派のまえにひざまずくもつとも恥ずべき行為である。

陶鑄はいう。「作家の創作上の自由を十分に發揮させなければならぬ。作家のペンは作家  
自身のものであり、作家の思想も作家自身のものである。われわれは作家に自主的に創作させ  
るべきである」②と。これは、露骨きわまるペトフィ・クラブの反革命スローガンである。世  
の中には、具体的な自由があるだけで、抽象的な自由などはない。階級社会では、階級的自由

① 『理想・情操・精神生活』、第七五ページ

② 『思想・感情・文采』、第三三ページ

があるだけで、超階級的自由などはない。すべての文学・芸術創作はみな特定の階級の政治に奉仕するものである。階級的政治から遊離した「自由」な文学・芸術はないし、またありえない。作家をもふくむ、すべての人の思想は、それがどのように特殊な形態をとるにしても、みな孤立した「自分の思想」などではなく、特定階級の思想のあらわれであり、特定階級の利益、願望のあらわれであり、特定社会の階級関係の反映である。七億の中国人民には七億種の「自分の思想」があるというのだろうか。もちろん、そうではなく、基本的には二つしかないのである。その一つはプロレタリア階級の世界観、すなわち毛沢東思想であり、いま一つはブルジョア階級の世界観、すなわち種々さまざまなブルジョア個人主義である。毛沢東思想からはなれた「創作の自由」とか、「自主的な創作」とかは、化物をそそのかして「自由」に社会主義を攻撃させ、資本主義を宣伝させ、しかも、これらの化物に反撃をくわえるプロレタリア革命派のすべての自由をはく奪して、資本主義復活の犯罪的陰謀に奉仕するものである。「創作の自由」などというものは、ひたすらブルジョア階級の奴僕になるためのイチジクの葉にすぎないのである。

陶鑄はいう。「生活は多方面にわたっており、一つの型にはまるものではないのだから、ワクをもうける必要はない」①と。これこそ、例の「題材決定反対論」である。それは、「ワク」に反対するという口実で、革命的作家が社会主義時代の階級闘争をつとめて反映することに反対し、労働者、農民、兵士をつとめてたたえることに反対し、プロレタリア階級の英雄的人物をつとめて描きだすことに反対するというねらいである。「生活は多方面にわたっている」というが、その実、それは二つの主要な側面をもっているにすぎない。その一つは、毛主席の革命路線にみちびかれて歴史の前進をうながすプロレタリア革命派と広範な勤労人民の革命闘争の生活であり、いま一つは歴史の前進にさからうブルジョア反動派の腐りきった反動的な生活である。われわれは、自分の歴史的使命を真に自覚しているプロレタリア革命派の闘争生活を主体とし、方向とし、賛美と描写の中心とし、そして、このような典型的な英雄的人物をつとめて、史上に例をみないわれわれの英雄的時代を反映し、毛沢東思想の偉大な力と偉大な勝利を反映すべきである。ブルジョア階級の反動的な腐りきった生活は、批判、攻撃、暴露の対象となりうるだけで、けっして創作の主要な「側面」とはなりえない。「一つの型にはまるものではない」というが、かならず型というものはあるのであって、陶鑄の心のなかにある

① 『思想・感情・文采』、第四五～四六ページ

「生活」は、実際には、かれが口をきわめてほめたたえた小説『三家巷』のなかのあのブルジョア階級の下品な雰囲気と退廃的な気分であり、歴史のゴミのためのなかの腐りきった残滓である。このことがまだはつきりしていないといえるだろうか。

文学・芸術作品は「現実をありのままに反映しさえすれば、……その役割はときに社説や報告におとらないと、わたしは思う。」① これもまた、胡風の「真実描写」論をそのまま焼きなおしたものである。どんな文学・芸術作品でも、そこに作りだされた形象はみな、作者の政治的傾向、階級の愛憎をあらわしており、抽象的、傍観的に「現実をありのままに反映した」ものなどはない。プロレタリア革命派は徹底した唯物論者である。徹底した唯物論者はなにものをもおそれない。プロレタリア階級の立場にたつてはじめて、本質の面から歴史の過程をありのままに反映することができるのである。ブルジョア階級と修正主義の反動的文学・芸術が労働兵を歪曲し、現実を歪曲しているのは、かれらの反動的な史的観念論の世界観の必然的な結果である。抽象的な「真実描写」を提唱するのは、文学・芸術が毛沢東思想を宣伝することに反対し、文学・芸術が共産主義精神で人民を教育することに反対し、文学・芸術の階級性を

① 「思想・感情・文采」、第三ページ

抹殺し、おおいかくして、搾取階級を美化し、プロレタリア階級を戯画化する一連の大毒草に「理論」的根拠をあたえるためである。これはすでに、ブルジョア文学・芸術の兵器庫のなかでもっともぼろぼろになり、もっとも古臭くなったしろものなのである。

「よい面をみてもよいし、悪い面をみてもよい、……作品のなかで欠点を描写することをゆるすべきで……人民公社をたたえるとき、なにもかもすばらしいといわなければならないような印象を、ひとにあたえてはならない。」① これは「暗黒暴露」論であり、毛主席に早くから痛烈に反ばくされた「光明と暗黒をともに重んじ、半々にえがく」という反動理論の焼きなおしである。われわれは生活のなかの主流と支流を区別すべきである。主流の面をしつかりとつかまえてはじめて、社会の前進の本質を典型的に反映することができるのである。支流はただ主流の引き立て役、本質をあらわす手段、全局の副次的な側面、前進過程における局部的、一時的な曲折とすることができるだけで生活の主な内容とすることはできない。われわれは光明の描写を主とし、社会主義革命と社会主義建設の偉大な勝利、すなわち毛沢東思想の偉大な勝利にたいする賛美を主とし、天地をゆるがすプロレタリア革命戦士の英雄的気概と闘争の知

① 「思想・感情・文采」、第四六〜四七ページ



惠の表現を主とし、われわれの時代の労働者、農民、兵士の英雄像の描写を主とすべきであつて、「よい面」と「悪い面」が半々といったものではない。人民公社をえがくとき、人民公社の優越性を十分にたたえなければならぬのはいうまでもないことであるが、その各発展過程における欠点やあやまりをひとつひとつ並べたてる必要があるだろうか。今人民公社はすばらしい♪という歌があるが、これに、「人民公社は欠点がある」という一句をつけくわえる必要があるだろうか。局部的、個別的な現象を誇張したり、ふれまわったり、あくどいデッチあげをおこなつたりするのは、帝国主義、修正主義、ブルジョア階級がデマ・中傷をおこなうおきまりのやり方であつて、この古株の右派分子はそれをそっくりまねてにすぎないのである。光明をたたえるのを主にするからといって、矛盾を回避する必要があるだろうか。敵のあがきと反撃を回避する必要があるだろうか。衝突の鋭さを低める必要があるだろうか。その必要はない。社会は階級闘争のなかを前進するものであり、プロレタリア階級の革命勢力はつねにブルジョア階級の反革命勢力との激しい闘争のなかで前進の道をきりひらいていくものである。階級矛盾、階級闘争の典型にたいする歴史的概括をつうじてはじめて、光明、勝利、英雄的人物を表面的ではなく深くつつこんで、貧弱ではなく雄々しく描きだすことができる

のである。陶鑄の「暗黒暴露」論はかれの暗黒な魂とともに、革命的人民によって歴史のゴミのためのなかへ投げこまれてしまふであらう。

フルシチヨフ式の野心家を見抜かなければならない

さきにあげたいくつかの面からも容易にわかるように、陶鑄はまぎれもなく網からもれた大物の右派分子であり、修正主義者であり、中国のフルシチヨフに代表されるブルジョア反動路線の忠実な執行者、宣伝者であり、まぎれこんだ反革命の二面派である。かれの本のなかで売りさばっている国民党の一連の反動哲学や毒素にたいしては、徹底的な消毒をおこなわなければならない。

陶鑄はフルシチヨフ式の野心家である。かれは、資本主義の政治的方向をかたく固持している。かれは社会主義を極度に憎み、日夜、資本主義にあこがれている。政治、文化の面から生活の面にいたるまで、かれが「理想」としているのはすべて、中国で資本主義を復活させることである。かれの頭のなかにつまっているのは、裏切り者の哲学から「士はおれを知るものために死す」といったたぐいの搾取階級の反動的な世界観である。だが、プロレタリア

独裁のもとでそれを暴露されないようにするために、かれはちよつとした革命のペールをまわって自分を偽装せざるをえないのである。この男はきわめて不正直である。表裏のある行動をとり、大きな口をたたき、意気揚々とまくしたてていたかと思ふと、たちまちもつてまわつたことをいう——これが、かれのいつもやってみせる演技なのである。だが、社会主義の道を歩むのか、それとも資本主義の道を歩むのかという根本問題で、毛沢東思想という照魔鏡をあててみれば、こうした偽装もたちどころにひきはがされ、正体をすっかりさらけだしてしまう。この二冊の本は、資本主義の道を歩む動かせない証拠ではないだろうか。

フルシチョフ式の野心家というものは、みな党をのつとろうとする陰謀家である。かれらは、毛主席をはじめとするプロレタリア司令部に反対し、毛沢東思想に反対し、プロレタリア革命派に反対するために、百万手をつくし、さまざまな陰謀手段をもちい、ひとにぎりの修正主義分子の手にある権力を拡大し、恥知らずな自己宣伝をおこなう。陶鑄がこの二冊の本をだしたのも、資本主義復活の世論準備をおこなうためであるとともに、かれらひとにぎりの修正主義分子の権力を拡大する手段のひとつであった。本のなかに『「西行紀談」の序言』という文章がある。この『西行紀談』はまえは『随行紀談』といって、かれが数人の黒い秀才をひき

つれて遊びまわり、口から出まかせにとうとうとしゃべりまくつたことを、黒い秀才たちがみことりのように「記録」し、それに筆をくわえて新聞に発表したものである。「紀談」とは、かれの「談」話の「記」録ということである。こうして、あつかましくも「二十七編にまとめあげた」のだ！ あつかましくも発表したのだ！ あつかましくも自分で書名をきめ、序言、題字を書いたのだ！ これはまさしく「南の霸王」になろうとしていたのではないか。

『理想』および『思想』が一連の反動的観点を宣伝するとき、そこにはこういった権力をみせびらかす自己吹聴がみちていた。これらの「作品」で、かれはプロレタリア司令部の権力を奪取する世論準備をしようとしたのである。陶鑄は地方から中央にきたのち、手をあのように長くのばし、プロレタリア階級から権力を奪取しようとする熱狂ぶりを数カ月のうちにあのようににきわだつて暴露して、手段をえらばず投降分子や裏切り者をかきあつめ、すでに革命的な人民によって摘発された悪党どもを買収し、毛主席をはじめとする党中央にさからい、革命派に打撃をあたえたために、どのような二面派の口をつかっても、こうした反革命的野心をおおいかくすことができなくなつてしまった。この反面教師から、われわれはフルシチョフ式の人物を見抜くひとつの重要な教訓をくみとることができるのではないだろうか。

陶铸は卑劣な実用主義者である。かれは投機商人の口をもっている。修正主義を売りさばき、いわゆる「教条主義」すなわちマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を攻撃し、それに反対するために、極右的な姿であらわれたかと思うと、たちまち極「左」的ポーズをとり、こうして、すっかりしていない中間の大衆をむしばみ、まどわし、あざむき、自分が摘発されないように守るのである。陶铸は党中央宣伝部にやってきて指導工作を担当してのち、資本主義の道歩む党内最大の実権派の、革命的な大衆弾圧の忠実な執行者となった。かれはやつきになって、毛主席の『司令部を砲撃しよう』という偉大な大字報に反対した。かれは懸命に一連の化物を保護した。ところが、大衆がブルジョア反動路線の批判に立ちあがると、かれは身をやつして、ただちに極「左」的な無政府主義の姿でおどりだし、「文化大革命のなかで、すべてを疑うのは正しい」とか、「すべての司令部がどんな司令部であるかはつきりしない……わたしは普遍的に砲撃することを主張する」とか、「だれにでも反対してよい」とかわめきたてた。かれは「多数に打撃をあたえ、ひとにぎりのものを守る」というブルジョア反動路線を大いに「創造的」に「発展」させた。みたところ、珍らしいほど「左」のようだが、その実、形は「左」で実際は右なのであった。そのねらいはやはり、プロレタリア司令部とブルジョア司

令部の区別を混同させて、毛主席をはじめとするプロレタリア司令部にほこ先をむけ、資本主義の道歩むひとにぎりの実権派がこのさわぎのなかで関所をすりぬけるようにさせるところにあった。「すべてを疑う」とは、ほかでもなくプロレタリア司令部に刃向うということである。「すべてを疑う」といいながら、自分自身を疑わず、「すべてを倒す」といいながら、自分自身を倒さない。これは不思議ではないだろうか！同志たちに注意していただきたいことは、いま、あるひとにぎりの反革命分子もこの方法をもちいており、かれらはみかけは極「左」だが実際には極右のスローガンをかかげて、「すべてを疑う」妖風をまきおこし、プロレタリア司令部を砲撃し、挑発や離間をおこなって火事場どろぼうをはたらき、毛主席をはじめとするプロレタリア司令部を動揺させ分裂させて、人にはいえない罪悪的な目的をとげようと夢みている。いわゆる「五・一六」の組織者と操縦者は、このような陰謀をくだてる反革命集団なのである。これは、徹底的に摘発されなければならない。だまされて真相をはっきり知らない青年たちは、猛省して反撃に立ちあがらなければならない。絶対にペテンにかかってはならない。この反革命組織は二つの目的をもっている。ひとつは、われわれの偉大な指導者毛主席をはじめとする党中央の指導を破壊し、分裂させることであり、いまひとつは、プロレタ

リア独裁の主要な支柱である偉大な中国人民解放軍を破壊し、分裂させることである。この反革命組織は公然とは姿をあらわすことができません、この数ヵ月らい、北京で地下にもぐっており、そのメンバーや指導者もほとんどがいまだにはつきりしていない。かれらは夜ふけにだけ、ピラを貼ったり、スローガンを書いたりしている。こうした人物については、いま広範な大衆が調査研究している最中であり、まもなく明らかにされるだろう。こうした人物にたいしては、毛主席がわれわれに教えている階級分析の方法をもちいて、かれらのブルジョア階級とプロレタリア階級にたいする態度をみ、だれを支持しだれに反対しているかという政治的偏向をみ、かれらの歴史をみさえすれば、変化きわまりない現象のなから反革命の黒い手を発見することができる。かれらはすでに暴露した部分をおおいかくそうとして、ことさらに「ゆき過ぎ」をやったり、「公正」をみせかけようとしたりしているが、そうすればするほど、ますます十分にその野心家の正体を暴露するのである。たとえば陶鑄——この修正主義者は、明らかに盗人でありながら、無理に聖人をよそおうとし、明らかにブルジョア階級と「心を一にする」と公然と極右的な宣言をしておきながら、たちまち「すべてを疑う」という極「左」にまではね上がっている。しかし、そのほこ先を終始プロレタリア革命派にむけていたので、か

れの野心家の正体をあますところなくさらけだしたのである。

階級闘争の深化、プロレタリア革命派の勝利によって、敵は闘争戦術をたえず変えなければならなくなっている。ひとつの反革命の陰謀が見破られると、敵はまた別の手にうったえ、二つの手口をかわるがわるに使う。しかし、これらの悪党どもも、すべてを洞察する毛沢東思想からのがれることはできない。当面の勝利の情勢のもとで、われわれは闘争の大方向に十分注意し、毛主席をはじめとするプロレタリア司令部を守ることに十分注意し、毛主席と党中央によって定められた統一的な作戦配置をおしすすめることに十分注意し、政策と戦術を把握することに十分注意し、大多数の人びとを結集させることに十分注意し、陶鑄式の人物に、右の面あるいは「左」の面から、または同時に二つの面から、われわれの戦線をかく乱させないよう十分注意しなければならない。左派が誤りをおかせば、右派がそれにつけこむ——これはむかしからそうである。われわれは大批判のなかで、階級闘争の歴史的経験を総括することによって、この点をいっそう深く理解すべきである。

『紅楼夢』第五章のなかに「聡明果」という詩があり、最初の二句は「計略をめぐらして聡明そうだが、逆に自分の命をなくしてしまう」とある。毛沢東思想に反対し、みずから「聡

明」だと思ひこんでいるフルシチョフ式の野心家はすべて、陶鑄が発明した「有名」な「首のすげ替え術」(第八期第十一中総の決議に反対して、資本主義の道を歩む第二の党内最大の実権派を写真でめだたせるために、その人物の首から上をきりとつて他のある人の写真に貼りつけたこと)にいたるまで、かげでさまざまな「計略」をもてあそび、その技術は最高度にしたがするが、ついには石を持ちあげて自分の足を打ち、自分の失脚の条件をつくりだすのである。武漢地区の資本主義の道を歩むひとにぎりの実権派も、同じように頭が単純で、反動思想をもった愚かものである。陰謀をもてあそぶものにはよい末路はない。広範な大衆が立ちあがれば、どんな悪事もかくしきれなくなる。毛主席のプロレタリア革命路線に反対する修正主義の悪党どもはかならず身をほろぼすだろう。これは歴史の判決である。このひとにぎりのフルシチョフ式の野心家も、いかにあがき、いかに詭弁をろうしようとも、けっしてこの歴史の判決からのがれることはできないのである。

プロレタリア文化大革命の奔流がとうとうと流れていく。毛沢東思想の輝かしい金色の光が全中国、全世界を照らしている。中国のプロレタリア革命派は勇敢であり、中国の革命的人民も勇敢である。われわれはかならずこの大革命を最後までやりぬくであろう。資本主義の道を

歩むひとにぎりの実権派からの巻き返し、攻撃、デマ、挑発や、帝国主義、各国反動派、現代修正主義者からのさまざまな中傷、歪曲、誹謗、わめきも、けっしてわれわれの前進をはばむことはできず、かれら自身がこのうえなく愚かであり、滅亡にひんした窮境におかれていることを立証するだけである。同志のみなさん、中国の大地を洗いきよめているこの大暴風雨に、もう手をあげて歓呼をおくろうではないか。毛沢東思想は無敵である。人民の力は無限である。革命的な新生の事物ははばむことのできないものである。文化大革命というこの偉大な、しかし曲りくねった道を通りぬけたのち、かつてみられなかった強大で、堅固な、統一されたプロレタリア独裁の偉大な社会主義の中国が巨人のように世界の東方にそびえ立ち、人を食う二〇世紀の悪魔どもに手痛い打撃をあたえるのを、人びとはやがて目にするであろう。

陶鑄の二冊の本を評す

---

1968年 初版発行

定価 40 円

出 版 者

外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万莊)

発 行 者

中 国 国 際 書 店

(北京 P.O.Box 399)

---

编号: (日) 3050-1784

3-J-806P

00025

## 既刊図書案内

### ★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第一卷)

三〇〇円

本巻には、第一次国内革命戦争の時期（一九二四～一九二七年）と第二次国内革命戦争の時期（一九二七～一九三七年）における毛沢東同志の十七編の著作がおさめられている。

毛沢東著作選

上製  
並製  
四五八〇円  
四四〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録

赤色ビニール表紙  
一五〇円

毛沢東主席の人民戦争についての語録

赤色ビニール表紙

二〇円

中国社会各階級の分析

三〇円

新民主主義論

六〇円

湖南省農民運動の視察報告

六〇円

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

三〇円

大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ

二〇円

延安の文学・芸術座談会における講話

四〇円

毛沢東同志は論じている――

帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である

四〇円

アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話

三〇円

「人民に奉仕する」「ベチューンを記念する」「愚公、山を移す」

四〇円

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と

そのすべての手先をうち破ろう

三〇円

――アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人、コンゴ  
(レ) 人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話

敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである

三〇円

書物主義に反対する

三〇円

農業協同化の問題について

四〇円

文学・芸術に関する五つの文獻

二〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店(北京)

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店(北京)



★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦

目次内容

三四〇円

国際共産主義運動の総路線についての提案  
ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展  
スターリン問題について

ユーゴスラビアは社会主義国か  
新植民地主義の弁護人

戦争と平和の問題での二つの路線

根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である

プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

フルシチョフのエセ共産主義とその世界的教訓

フルシチョフはなぜ退陣したか

付 録

ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会にあてた書簡

ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産黨員にあてた公開書簡

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

人民戦争の勝利万歳

林彪 四〇〇円

——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線

統一戦線の路線と政策を正しく実行する

農民に依拠し、農村根拠地を樹立する

新しい型の人民の軍隊を建設する

人民戦争の戦略・戦術を実行する

自力更生の方針を堅持する

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義

人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先のうち勝つ

フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定

三〇〇円

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報

三〇〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

近刊予告

★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第二卷)

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

人間の正しい思想はどこからくるのか

党内のあやまった思想の是正について

小さな火花も広野を焼きつくす

日本帝国主義に反対する戦術について

中国革命戦争の戦略問題

抗日の時期における中国共産党の任務

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

中国共産党全国宣伝工作会議における講話

人間の正しい思想はどこからくるのか

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

